九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

〈貧困〉を生きることの社会学 : フリーター／ホームレス・貧困の文化・再生産

益田, 仁

https://hdl.handle.net/2324/1654619

出版情報：九州大学, 2015, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏　　名　：益田　仁

論文題名　：＜貧困＞を生きることの社会学
　　――フリーター／ホームレス・貧困の文化・再生産――

区　　分　：甲

博　士　論　文　の　要　約

本研究の目的は、現代日本社会における不平等・貧困（以下、双方をまとめて＜貧困＞と表記）の再生産メカニズムの一端を明らかとすることである。現代の日本社会では、経済的格差の拡大が進み、新しいかたちの貧困問題が顕在化しつつある。言い換えるならば、現代日本社会の生活保障システム（雇用と社会保障）は、構造的に一定数の不安定・低賃金雇用者や野宿者を生みだすものとなっている。しかしそうした仕組みが維持されるためには、低賃金職や野宿生活を引き受ける人々の存在が当然ながら必要である。これまでの研究では、欧米諸国では階級文化が人々を特定の職業や地位に水路づけたり、そうした境遇を納得させたりする役割を果たしている――つまり、階級文化が再生産に機能している――と指摘される一方で、日本においては階級独自の文化は欧米諸国ほど顕著には認められないと認識されてきた。しかしそれは、分厚い中産階級が存在した、いわゆる「総中流社会」を背景とした認識であり、階層・階級化が進む現代の日本社会においても同様にあてはまるものかどうかは明らかではない。そこで、本研究ではつぎのような問いを立てたい。現代の日本社会において不平等・貧困状態に置かれた人々は、どのように自らの人生を受け止め、意味づけ、日々の暮らしを送り、将来への展望を抱いているのだろうか。そして、そうした主体的な営みは、再生産過程でどのような役割を果たしているのだろうか。本研究では、低賃金で不安定な雇用で働く若者たち（いわゆるフリーター）の生活世界から不平等を生きるという経験を、野宿生活を送る高齢者（いわゆるホームレス）の生活世界から貧困を生きるという経験をとらえることにより、不平等・貧困の再生産の動的過程を主体の側から考えてゆく。以下、各章の概要をかいつまんで説明したい。

まず序章では、本研究の背景・目的・方法について確認した上で、本研究を研究史上に位置づけその意義を確認し、論文の構成について述べている。

第１章「不平等・貧困をめぐる研究の動向と日本社会の状況」では、まず貧困研究の歴史を概観した上で貧困（概念）を R.リスターおよび岩田正美にならい定義した。ついで 1990 年代後半より隆盛してきた格差社会論を検討した上で、Z.バウマンと S.サッセンの議論に拠りながらフリーター／ホームレスを先進各国に共通する新しい貧困問題であることを確認した。その上で、フリーター／ホームレスの定義と国内の研究レビューを行い、日本社会における両者の輪郭を描いた。

続く第２章「社会学的不平等・貧困研究の視座――再生産論を中心として」では、社会学的な不平等・貧困研究の歴史を俯瞰し、再生産概念について検討・定義した上で、S.ボウルズと H.ギンティスの対応理論、P.ブルデューの文化的再生産論、P.ウィリスの対抗理論など、再生産論の代表的な理論を確認した。さらに再生産論と親和性の高い O.ルイスの＜貧困の文化＞論を検討した。

それを踏まえ第３章「再生産論における“主体的なもの”――アスピレーション・ハビトゥス・希望」では、再生産論において彫琢されてきた“主体的なもの”――具体的には、アスピレーショ

ンやハビトゥスなどの概念――の理論的位置づけを個別に検討した。さらに、＜貧困の文化＞論を手がかりとして、現在志向性が＜貧困の文化＞の核であり、希望がそれを消失させることを確認し、「希望－現在志向」という観点から＜貧困＞状態に置かれた人々の生き方をとらえることの意義と可能性を論じた。

第４章「不平等を生きる――低賃金職で働く若者たち」では、フリーターは現在志向性が強いという先行研究の知見を踏まえた上で、不安定・低賃金職で働く３名のフリーターへの継続的な聞き取り調査の結果を検討した。その結果、正規下層職と非正規職が重なり合う労働市場内に位置づけられた若者たちは、その職業の不安定性から将来的見通しを立てることができない一方で、しかし彼らは現在志向を醸成しうる下位文化を形成しえないことが確認された。彼らは非正規雇用（あるいは先の見通せない正規雇用）を逸脱として捉える社会規範に日々責め立てられており、そうした葛藤状況から逃れるために何がしかの“希望”を見出さざるをえないことを明らかとした。

第５章「貧困を生きる――高齢の野宿者たち」では、ホームレスと生きがい・生きる意欲について論じた先行研究を踏まえた上で、野宿生活を送る２名の高齢野宿者への同行調査の結果を検討した。その結果、自ら働くことができず、誰の助けも期待できないという困難な生活状況において形づくられた“希望”と主体的実践は、野宿生活を支えるものであると同時に、その実践自体が野宿生活からの脱出を遠のかせてしまう性質（福祉体制からの排除や自主的退却）ももちあわせていることを明らかとした。

以上の議論を踏まえ、終章では、フリーター／ホームレスともにその生活を支えるために何らかの“希望”が必要とされているが、その“希望”が当事者の意図とは逆の機能を結果的に果たしており、再生産の過程で“希望”が重要な役割を果たしていることを論じた。

本研究の意義と再生産論への理論的貢献は、これまで実証的に解き明かされていなかった現代日本社会の再生産メカニズムの一端を、生活者（フリーター／ホームレス）の視点から示したことに求められる。具体的には、＜貧困＞が拡大しつつある変動期の現代日本社会を事例として、再生産の動的プロセスの一端を示し、構造に規定された“希望”をもって生きる主体（による再生産）という新たな主体像（と再生産過程）を描いたことである。このことは、日本独自の再生産メカニズムの一端を解き明かしたことにもつながっている。つまり、階層・階級間の文化的差異が欧米諸国ほど明確ではないが、階層・階級化が進みつつある近年の日本社会においては、階級文化と同等の役割を果たす“希望”が主体の生活の領域内において個人レベルで選びとられているのである。以上を踏まえ、最終的には、個人化した“希望”ではなく、共同性に裏付けられた希望がもつ可能性について示唆した。